

ごっこ遊びの援助に関する研究（6）

—— 1歳児のイメージの共有過程について ——

田口 鉄久

(高田短期大学)

I. 目的

ごっこ遊びでは幼児は互いにイメージを表出し、受けとめ、調整しながら遊んでいる。筆者が過去に観察した4・5歳児の事例では、幼児はごっこ遊びの中で相手のイメージに柔軟に同調できる能力をもっていることと、相手の気持ち（思い）を理解し共感する素直な心をもっていることがイメージの共有の主要因だと考えた。ごっこ遊びでは当然イメージの変化も非共有も見られたが、そのことによって遊びが消滅することはほとんどなく、むしろ楽しいアイデアを加えながら、変化・発展し、充実の方向を示した。

このようなイメージの共有は1歳児の見立て遊び、ふり遊び（いずれも初期的なごっこ遊びとすることができる）では、どうなっているのだろうか。事例を通して検討する。

II. 方法

2003年7月～12月、合計6回三重県河芸町Y保育園（私立）にて1歳児約15名の遊び・生活の様子を観察した。いずれも観察時間は午前10時ごろから1～2時間で、この時間帯は自由な遊びが主であったが、時に散歩、歌や手遊びなど皆で取り組む活動などもあった。

得られた観察記録のうち、本研究では前記の見立て遊び、ふり遊びとして仲間同士イメージが共有される場面に焦点を当て、考察する。

III. 結果と考察

見立て遊び、ふり遊びとして仲間同士イメージが共有されると思われる場面は、6観察事例中4観察事例、10箇所あると考えた。それらをカテゴリ化すると、次の3項目にまとめることができる。

1. 見て同じようなことをする。(6箇所)
2. 他児の働きかけに応じる。(3箇所)
3. 保育者が行為と言葉でイメージをつなげる。(1箇所)

以下に上記3項目にそれぞれ該当する事例をあげ、考察する。なおアルファベットの小文字は女児を、大文字は男児を表す。

1. 見て同じようなことをする。

<事例1> 「ぱりぱり」1歳児/7月（2003）

- a 児 筆者のワイシャツの胸ポケットへ（フェルトで作った）すし、ケーキなどを詰める。それを取り出したり入れたりすることを繰り返す。
- s 児 a 児と同じようにワイシャツの胸ポケットへ詰める。せんべいを取り出し「ぱりぱり」と言って食べるふりをする。
- R 児 胸ポケットからすしを取り出して食べるふりをする。さらに残りを取り出して、ままごとテーブルの方へ持って行き、「ないない」と言う。

【考察1】

s 児は a 児の行為を見て同じようにする。さらに R 児もその行為をまねる。これはポケットから出したものを食べる“ふり”をするという行為が、視覚を通して相手に伝わったのであり、そこではイメージを伝えるような言葉はほとんど発せられていない。高橋（1993）はごっこ遊びにおけるコミュニケーションについて「言語チャンネルのみ、非言語チャンネルのみ、あるいは両チャンネルの併用が行われる」と述べているが、低年齢の場合は“見ることによってイメージが伝わっていく”

場合が多いと言える。当然ながら共有場面は限定的であり、相互交渉もさほどなく、一人でふり遊びをすることが多い。

また、別の事例ではブロックで組んだ自動車や象が他児へイメージとして伝わった例もある。物の見立ても、まねて作ることを通して、イメージとして伝わっていくことがある。

2. 他児の働きかけに応じる。

<事例2> 「ハナナ」1歳児/7月(2003)

a児 手作りの果物、すし、ケーキなどが入った箱を持ってくる。皿も3枚持ってくる。近くにいたm児と筆者に皿を渡す。m児の皿にはバナナを入れ、筆者の皿にはすしを入れる。

筆者 「いただきます」と食べるふりをする。

m児 皿に自分でケーキ、カキを加え、「ハナナ」と言いながら食べるふりをする。それを少し離れたところへ運び、再び食べるふりをする。

【考察2】

a児が“突然” やって来てm児と筆者に皿を渡し、その中にバナナやすしを入れた。二人とも戸惑うこともなく食べるふりをした。a児は“どうぞ”というような態度ではあったが、言葉はなかった。

このことは、幼児は他児からの働きかけにさほど違和感を持つことなく同調していく柔軟性があることを示しているように思える。他の事例で、よく似たケースでも関心を示さない男児がいた例はあるが、幼児はおおむねこの種の働きかけを受けると、その流れに合わせて対応するようである。この姿勢が幼児同士のイメージをつなげる役割を果たしていると考えられる。

3. 保育者が行為と言葉でイメージをつなげる。

<事例3> 「おいしーね」1歳児/7月(2003)

Y児 保育士にケーキを渡す。

保育士 「イチゴのケーキ、パクパク・・・。Yちゃ

んも半分パクパク・・・」差し出す。

Y児 食べるふりをする

保育士 「Kちゃんも半分パクパク・・・」差し出す。K児も食べるふり。

保育士 「おいしーね」

s児 近くにおいて食べるふりをする。

【考察3】

まだ言葉でのコミュニケーションが十分できない幼児の遊びの中で、保育者が行為と言葉でイメージを伝えてやるのが、個々の幼児のイメージを他児へつなげてやることになる。保育士が直接働きかけたK児は無論、近くにいたs児も同じように食べるふりをしたことは、保育士の“行為を伴った言葉”が幼児に同じようなイメージを与えたのであろう。

IV. まとめ

1歳児の遊び観察していると、一連の遊びの中でいくつかの異なる行為をまねて遊び始める場面が出てくる。そのとき徐々にごっこ遊びの形に近づいてくるようにも感じられた。1歳児では、熱心に“見てまねる”ことでイメージの共有を行っていると言えるのではないか。

また、4・5歳児のごっこ遊びの中でみられると同様、1歳児でもイメージを伴った仲間からの働きかけを柔軟に(巧みに)受け入れる力が幼児に備わっていると感じる事例があった。このことがイメージの共有を促していると考えられる。

保育者はこれら1歳児が行う行為のイメージを言葉のイメージに重ねてつなげていく役割を持つのではないだろうか。

【文献】

高橋たまき「子どものふり遊びの世界」ブレーン出版 1993